

た氷を冷たい事も忘れて、手にく／＼か／＼へて持て
參ります、所が中にははじかんだ手を滑らせて、
道端に落して割れたと失望するものもありました
そこで私は可愛想だと考へて、一の名案を浮べま
した、翌日は氷が張りそうだと思ふ器物の中に、
棒切又はワラをさし込んで置いたのです、すると
手を直接氷にあてないで、容易に氷を運ぶ事が出
來ます、幼兒は之を見て大喜び、又翌日から手に
く／＼工夫をした手をつけて、氷を運んで參ります
之は私の園に於ける或冬の實驗であります。

觀察と云ふ問題に、充分ふれて居りませんかも
知れませんが、唯ありのまゝを記した次第であり
ます。以上

觀察の一日

名古屋 松若幼稚園

保育項目に觀察といふ、新しいと思へば古い
古いと思へば新しい、項目が一つ殖えましたが
保育の方法としては從來と少しも變りない様にし
てゐてよいのであろうが、よく社會の人から觀察
科といふことは、何のことかと尋ねられることも
あり、其特別に新しい仕事ではありません、抑
々教育といふことは皆觀察し觀察させねば出來ぬ
もので、私共保育に従事してから今日まで、ツツ
トやつておりますものをたゞ當局が、文字の上
に現はされたのみでありますと答へてもよいのであ
ります。

しかし、之に偏するとやゝ無責任の様にも思は
れますから、幼兒の欲する見聞を一層充分にさせ
たいと考へます、これからの満足させるには、第
一園内の施設を改善發達させねばならないことゝ
承知しますものゝ、今急にと出來がたい點もあり
ますので、取敢へず園外へ誘導し、僅かでも觀察

させたいと思ひ、先づ場所を、公園、神社、寺院
廣小路、(官衙會社交通機關)、學校、消防署、松阪
屋デパートメントストア、築屋食料日用品パザ
ー、等へ十名若くは二十名づゝ引卒し、觀察させ
ることにいたしました。

今その一日を誌上に掲げて皆様の御批評を仰ぐ
ことにいたしました。

日時 大正十五年十二月十六日午前十時

場所 松阪屋百貨店七階及四階 園より二丁

幼児 十二名(男兒)

保母 二名

一行は防寒具を纏ぶて出發した、道すがら口々に
嬉しいなうれしいなど、言つてゐたが間もなく
松阪屋南門についた、若い先生の先導で、エレベ
ーターに乗る、運轉手は、幼ない紳士を見てニッコ
リ笑ふ、保母さん運轉手の心理を試みたのであつ
たか、黙つて眼をふさぐ、いつの間によら、「途中

お降りの方は」など、もいはず七階の子供遊園場
まで運んで呉れた。

幼紳士エレベーターより出るや、早くも水禽類を
みつけてヤーあひる、つる、つる、あたまから血
が出てるよ、といふ兒をきいて、イヤあれはあんな
赤い毛が生ゐてるのだよと、言ふ。

保母、之をきいて、あれは丹頂鶴といつてねお
つむが赤いのですよサーよく見て來ませうと、側
へ連れてゆく。

問答

保母 御らんなさい、あのあひるの脚を、どう云
ふ風になつてゐますか。

幼兒 膜が張つてある。

保母 あれは「水かき」といつて、あれがあるか
ら、あひるは水の中を泳ぐことが出来るの
ですよ。

保母 何故水の中に入つても、濡れないでせうか

幼児 無言。

保母 羽毛の下から脂が出て、毛の上につくので

す、それで水がつかないのですよ。

保母 何をたべますか。

幼児 麩をたべる。

保母 麩ではありませんよ、どじょうか、又は小

さいお魚や虫をたべますよ。

幼児甲 僕お父さんと来たときじょうを、たべてあ

たよ。

乙 僕も見た……

丙 僕も見た。

其他の水禽を觀察させて、お猿の前にいつた、

猿さん葉のついたまゝの蕪をたべてゐた。

幼児等は、かぶらを食べてる、かぶらをたべて

る、などと大によるこび、一ツ二ツ三ツと猿を數

へ出した。

幼児、先生あれ猿の太將でせう、といふ、よく

見れば成程太將と幼児がいふ位の威嚴をもつたお

猿である、ほんとに太將でせうねといふ。

問答

保母 お猿は犬や猫の様であつて、又人によく似

てゐますね、どこが似てゐるでせう。

幼児甲 お顔です。

乙 お手手も足も。

保母 そうですね、お顔もよく似てるけれど、お

手手がよく似て人の様に何でも攫むことが

出来るのですよ。

と獸類として、人によく似た特徴を知らず、次

は、狐狸熊豹を黙つて觀察させた。

幼児甲 狐はだますよ。

乙 ヤー狐が鬼ゴツコしてるよ。

丙 狸おならびしてゐる、ヤー行列行列、小さ

いお腹だな、あれでも打てるのかしら。

甲 豹豹こはいよ。

丙 熊は力が強いよ、こはいな。

次は、小鳥を黙つて観察させた。

幼児 オーム、セキセイインコ、僕の家にもある

よ、ヒハ五十銭、など、定價をいひ出した。

次は孔雀を観察させた。

幼児 頻りに拍手して、羽毛をひろげさせようと

したが、反應がなかつた。

七階の観察を終り又も、エレベータに乗る、四階にお願しますよと、いはれた運轉手は、よろしうございますと、いつてすぐ運んでくれた。

幼児のよろこび、時間の經濟、保母の勞苦、などを思ふと、エレベータの有難味をしみく感じた、すぐ温室に入った、中程へ進んで、生々と生育しておる鉢植を見て、左の説明を試みた、この中にあるお花は寒がりだから、こんな温い所において可愛がつてやるのです、松や竹や杉や檜の木

などは、どんなに寒くてもお元氣な皆さんの様に
寒いお庭を威張つておるのです。

こゝは何といふ所でせう。

幼児甲 温室々と答ふ。

保母 なせ温いでせう。

幼児乙 下に火が燃てるから。

保母 左様ね下で火をたいてゐるからです。

幼児丙 ストーブだよ。そーだよ。

温室を出ると水槽に金魚の群れてるのを見た、その横に南天の紅々しい鉢植があつた、

保母 之は何でせう。

幼児 もみぢ、と答ふ。

保母 之は南天ですよ、きれいに紅葉してゐます
ね。

幼児 僕の家にもある、僕もある。

お正月の床飾りにと、根つきの葉ばたん、夥しく列べてあるのを見た。

幼児 先生之なあに、お菜でせう。

保姆 お正月床の間に生ける、葉ばたんですよ。

幼児 之れバイナツブルの木ですね、と。

サポテンを見て云ふ。

幼児 サポテンですね。

保姆 そうですよ、サポテンといふ熱い／＼お國

に出来るもので、きれいなテツバの様なお

花がさきますよ。

しばし自由にあちこち眺めてゐる間に、すつかり

忘れたい。

保姆 之れなあに、とはばたんを指す。

幼児 ポンテン。

南天と葉ばたんと混同して、新らしい名を造り

出した。ベンチに腰をかけてゐた、田舎風の男三

人ドット笑ひ、互に顔見合はせて、可愛い／＼もの

だねーといふ、幼児も共に笑ふ、誰か葉ばたん

といふ。

一時に多くの觀察をさせるのは、よろしからぬ事
と思ひ、一行を集めて下階へと降りた、一階賣場
の雑踏を觀て十一時十分園に歸つた。

